

おわりに



飢饉の碑

おわりに、今から240年前の天明3年(1783)浅間山大噴火(天明の浅間焼け)について述べよう。同年春から小規模噴火が続いた浅間山は、旧暦7月8日(現在の8月5日)に大爆発し、土石なだれが泥流となり、吾妻川から利根川に流れ込んで同日昼頃には前橋城跡(現群馬県庁)付近に到達、泥流によってはるか下流の銚子沖が黒くなったとされる。土石なだれにのまれた吾妻郡鎌原村など約140の村が被災し、死者の数はおよそ1,500人と考えられている。また、後年にわたり降灰の影響は深刻で、河床が上昇して氾濫し、各地で洪水が発生している。

ところで、高崎市倉渕町三ノ倉の藤森稲荷(稲荷山)境内に「飢饉の碑」がある。碑文には火山灰で耕作ができず、物価が高騰して多くの人が飢え「至末世其危不可忘者也(このことを後世まで忘れてはならない)」としている。このような石碑は、中央の歴史には記されない地域の記憶である。郷土の歴史を後世に残すことの意義を「飢饉の碑」は伝えたかったのではないだろうか。

前橋市・高崎市の遺跡位置図



今年度紹介している主な遺跡の所在地です。

前橋市

- | | |
|------------|-------------|
| 1 湯之口遺跡 | 12 中二子古墳 |
| 2 田口上田尻遺跡 | 13 前二子古墳 |
| 3 田口下田尻遺跡 | 14 元総社蒼海遺跡群 |
| 4 大胡城跡 | 15 元総社明神遺跡 |
| 5 膳城跡 | 16 元総社寺田遺跡 |
| 6 萩窪倉兼三遺跡 | 17 柳久保遺跡群 |
| 7 清里・庚申塚遺跡 | 18 筑井八日市遺跡 |
| 8 横沢柴崎遺跡 | 19 前橋天神山古墳 |
| 9 西原遺跡 | 20 荒砥前原遺跡 |
| 10 前橋城跡 | 21 山王廃寺跡 |
| 11 元総社北川遺跡 | |

高崎市

- | | | | | |
|-----------------|------------|---------------|--------------|------------|
| 1 大和田遺跡 | 6 井出谷頭遺跡 | 11 若田坂上遺跡 | 16 卸売市場周辺遺跡 | 21 多胡碑周辺遺跡 |
| 2 上野国分僧寺・尼寺中間地域 | 7 保渡田八幡塚古墳 | 12 八幡遺跡 | 17 矢中村東遺跡 | 22 南高原遺跡 |
| 3 上芝古墳 | 8 矢鳥館址 | 13 高崎情報団地II遺跡 | 18 八幡山遺跡 | 23 廻国供養塔 |
| 4 国府南部遺跡群 | 9 寺ノ内館址 | 14 中大類金井遺跡 | 19 山名原口II遺跡 | 24 飢饉の碑 |
| 5 太子塚古墳 | 10 芦田貝戸遺跡 | 15 高崎城跡 | 20 上野国多胡郡正倉跡 | 25 上野国分尼寺 |

東国千年の都

防ぎ・護り・祓う

— 乗り越える災厄 先人たちの知恵 —

赤彩のある甕
八幡遺跡 弥生時代

土持人埴輪
保渡田八幡塚古墳 古墳時代

前橋・高崎連携事業文化財展の開催にあたって

平成19年度から開催している前橋・高崎連携事業文化財展は、今回で16回目を迎えます。前橋市と高崎市が協力し、毎年テーマを変えて、それぞれが所有する貴重な歴史的資産を紹介しております。

今回は「防ぎ・護り・祓う」をテーマに、先人たちは災害や疫病、外敵から生命や財産を守るために何を行ったのか、また禁忌行為や儀式はどのようなものだったのか。そのような思想・信仰による先人の行動を出土遺物から探り、展示いたします。過去の災厄を乗り越える知恵を知ることで、現代の私たちが直面している様々な課題を解決する糸口になれば幸いです。



前橋市長 山本 龍



高崎市長 富岡 賢治

【主催】前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会

【後援】上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、(株)群馬よみうり新聞社、産経新聞前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ(株)、(株)エフエム群馬、まえばしCITYエフエム、(株)ラジオ高崎、(公財)前橋観光コンベンション協会、(一社)高崎観光協会

はじめに

古今東西の歴史において、人類の脅威となるものが「災害」「戦争」「疫病」であったことは議論をまたないであろう。

このことは、わが郷土—前橋市・高崎市—の歴史においても例外ではなく、先人たちは降りかかる災厄から身を守るため、様々な手段を用いて対処してきた。例えば、河川の氾濫や外的・侵略者から個々の生命や財産、集落・墓域などを守るために、われわれの祖先は堤や土塁を築き、さらには城館を構えた。また飢饉への備えとして、穀物などの食料を蓄えたのである。

一方で、人知を超える災害—天候不順・伝染病—には、雨乞い神事や加持祈祷など、神仏への祈願が行われた。また、ある種の文字(漢字)が呪力を持つと考えられ、祭祀に用いる器物などに刻まれたのである。

郷土の先人たちは災厄から身を守るために何をしてきたのか。「災害」「戦争」「疫病」など現代社会にも共通する問題は、実は遠い過去にも存在しており、われわれの先祖は様々な方法でこれらに対処してきた。歴史をひもときながら、その知恵と工夫を見てみよう。

テーマ I

防ぐ

安全・安心な日常生活を襲う脅威のうち、その最たるものは自然災害であろう。とりわけ本県は火山噴火に度々見舞われ、また平安時代に関東地方を襲った巨大地震は、前橋・高崎両市の遺跡でも痕跡が認められている。そのほか、敵対集団や略奪者などの外敵も大きな脅威である。人々は武具を身に纏い外敵の侵攻に立ち向かった。

災害と復旧の痕跡

筑井八日市遺跡 弘仁地震に伴う噴砂
写真は群馬県提供



【地震の痕跡】

平安時代に編纂された歴史書『類聚国史』には、弘仁9(818)年に本県を含む関東一帯で大地震(弘仁の大地震)があり、大きな被害があったことが記録されている。赤城山南麓の湯之口遺跡(前橋市粕川町中之沢)では山崩れによる堆積物が、筑井八日市遺跡(前橋市筑井町、小島田町)では液状化に伴って地中の砂が上昇し、地震当時の地表面に噴砂として広がった状況がそれぞれ確認されており、この地震との関連が指摘されている。

【噴火の痕跡と災害後の復旧痕】

本県では、古墳時代以降、浅間山や榛名山が大噴火しており、発掘調査では、これらの噴火の痕跡や噴火で被災した人々が元の生活を取り戻すために行った様々な痕跡が見つかることがある。

当時の人々は、度重なる噴火災害を受けた後もあきらめずに復旧に取り組み、その地で生活を続けたのである。

時代	年代	火山	主な遺跡	概要
古墳	3世紀末～4初頭	浅間山	西原遺跡(前橋市)	噴出物が環濠に堆積
	6世紀初頭	榛名山(二ツ岳)	元総社北川遺跡(前橋市)	噴出物と泥流によって水田が埋没
			井出谷頭遺跡(高崎市)	「天地返し」で畠を復旧
平安	6世紀中葉	榛名山(二ツ岳)	井出谷頭遺跡(高崎市)	「天地返し」で畠を復旧。水田の作り直し。
			元総社北川遺跡(前橋市)	6世紀初頭の噴火後に作られた水田が、噴出物と泥流によって再度埋没
平安	1108年	浅間山	元総社蕎麦遺跡群17街区(前橋市)	噴出物が切通道にレンズ状堆積
江戸	1783年	浅間山	卸売市場周辺遺跡(高崎市)	軽石を掘り返し元の耕作土と混ぜて水田を復旧
			若田坂上遺跡(高崎市)	大きな穴を掘り、耕地に積もった軽石を埋めて除去
江戸	1783年	浅間山	田口土田尻遺跡(前橋市)	泥流で覆われた農地に溝を掘り、泥流を埋めて田畑を復旧

敵を防ぐ

国府南部遺跡群(高崎市引間町ほか)の平安時代(11世紀)竪穴建物跡(H-4)で、焼け落ちた柱材に混ざり鉄鏃が確認された。矢が住人を狙ったものか不明だが、この頃上野国は、群盗(強盗集団)が横行し治安の悪化が知られる。上野国分僧寺・尼寺中間地域(前橋市元総社町・高崎市東国分町)で調査された室町時代末から戦国時代(15～16世紀)の墓地では、多くの被葬者の骨に刀や矢の傷があり、戦闘時の犠牲者を埋葬したとみられる。

先人たちは、時に敵を迎え撃つて防ぎ、防御のため「防具」も進化した。

古墳時代(5世紀末)築造の保渡田八幡塚古墳(高崎市保渡田町)に副葬された小札甲(掛甲)は、鉄や革の小さな板をつないで動きやすく工夫され、朝鮮半島から伝来したての優れた防具だった。その後、日本の甲冑は小札甲から発展したとされる。



保渡田八幡塚古墳
小札甲(掛甲)の破片

テーマ II

護る

日常生活を襲う脅威から護るべきものに、侵略者や敵対集団からイエやムラそして領地を、また盗賊などの略奪者からは財産や食料を護ってきた。城館には外敵を退ける工夫を施し、ムラや墓域には侵略者に備えた防御が施された。また水田を水害から護り、飢饉に備えて食料を蓄えてきた。

外敵や侵入者・侵略者から護る 集落・墓域

弥生人の集落はその多くが稲作を生業としていた。収穫物や財産をムラ同士の争いから護るための防御の意味合いが強いとされている環濠集落は、居住地(集落)の周りにぐるっと濠を巡らせる弥生時代に特有の形態である。清里・庚申塚遺跡(前橋市上青梨子町)では、幅2m、深さ70cm前後の濠が住居群を囲い、その規模は東西200mにわたる。



中二子古墳

また、墓という聖域を邪悪なものから護る役割を担った盾持人埴輪は、古墳の周堀に沿って結界を張るように一列に並べられた。中二子古墳(前橋市西大室町)から出土したものは、釣り上がった目と大きな顎で表情には緊張感が漂う。保渡田八幡塚古墳(高崎市保渡田町)から出土したものは、大きく見開いた目とへの字口が特徴で、威圧感いっぱいの顔をしている。顔や盾には魔除けの意味を持つ赤塗り(ベンガラ)や文様が付けられている(表紙右下埴輪参照)。



保渡田八幡塚古墳

外敵や侵入者・侵略者から護る 城館跡

赤城山南麓の丘陵地にある膳城(前橋市粕川町膳)は、鬼川とその支流に挟まれた天然の地形を利用して築かれた室町時代後期～戦国時代の平山城である。

大胡城(前橋市河原浜町・堀越町)は、天正18(1590)年に整備された安土・桃山時代から近世の城址である。本丸と二ノ丸には石積を伴う虎口が残り、深い堀や枳形門で侵入者を防いだ。

前橋城(前橋市大手町)は、戦国時代末期に築城された。慶応3(1867)年に再築され、大手門に稜堡式の手法を取り入れるなど近代的な城郭であった。

寺ノ内館(高崎市浜川町)は、室町～戦国時代の館である。館は低地



膳城北曲輪跡

に囲まれた微高地上に築かれ、内堀と土塁に囲まれた内廓に水を湛えた外堀が囲み、内部はさらに中堀で区画される。

鎌倉～室町時代の矢島遺跡(高崎市浜川町)は寺ノ内館の北西にある。館は内堀と土塁に囲まれた内廓に外堀で囲まれた外郭が付される構造で、外堀東辺は当時、主要水路として機能した。内郭東辺に「折」があり、北西隅に櫓が設置され防御力を高めている。



寺ノ内館址

財産・食糧を護る

【財産・食糧を貯える】

元総社蒼海遺跡群(前橋市元総社町)からは、丁寧な地盤改良を施した大型の建物跡が数多く見つかった。これらは古代上野国の中心、上野国府に関連する倉庫群の可能性があり、各地から運ばれた大切な物資が収納されていた。

上野国多胡郡正倉跡(高崎市吉井町池)は、古代多胡郡の役所である多胡郡衛の倉庫群となる。倉庫には多胡郡から集められた米が収納された。最大の倉庫は、瓦葺きの法倉である。



上野国多胡郡正倉跡の法倉跡

元総社蒼海遺跡群(133)の大型建物跡



【飢饉に備え、農耕地を拡大する】

高崎市南部では、平安時代に豪族の物部氏によって水路が整備され広大な農耕地が開発された。矢中村東遺跡(高崎市矢中町)の水路跡から発見された「物部私印」は、物部氏が用いた平安時代(9世紀)の貴重な銅印である。



「物部私印」印影
『矢中村東遺跡』1984年より

テーマⅢ

祓う

古来、日常を襲う脅威を取り除くために、呪術的な行為や方法が行われてきた。穢れを祓うために身代りの品に移して水に流し、また、呪術的な符号や造形、道具に潜む力を利用して魔除けが行われてきた。それらは考古資料からもうかがい知ることができる。

ケガレを祓う

「祓」は、罪や穢れ、災厄などを心身から取り除くための神事である。7世紀後半に律令国家体制が整備されると「律令的祭祀」が国家祭祀として行われるようになり、毎年6月と12月の晦日(月末)には大規模な祓である「大祓」が国家行事として行われた。大祓は、国司など中央集

権的行政組織を通じて地方の末端まで広まった。

元総社神明神遺跡や元総社寺田遺跡(前橋市元総社町)では、上野国府域を流れる牛池川の低地部から9～10世紀代の木製の人形、斎串、舟形、馬形などが出土している。



元総社寺田遺跡 舟形木製品



元総社寺田遺跡 馬形木製品



元総社寺田遺跡 人形・斎串

写真は群馬県提供

魔除けの呪符・記号

古代の人々は、さまざまな災いから身を守るために土器に魔除けの記号を記した。

元総社蒼海遺跡群(前橋市元総社町)からは、五芒星を刻んだ奈良時代(8世紀)の土器が出土している。

秋篠倉兼Ⅲ遺跡(前橋市荻窪町)は豪族に関連する集落であり、「井」が刻まれた奈良時代(8世紀)の土器が見つかった。「井」は護身に関係する九字を略した記号と推定される。

国府南部遺跡群(高崎市引間町ほか)では、花卉の模様を墨書した平安時代(9～10世紀)の土器が確認されている。この花卉は、仏教による救



南高原遺跡「子主井井」刻書土器
『長根遺跡群発掘調査報告書』II 1994年より

済に関わる蓮弁と捉えられる。

南高原遺跡(高崎市吉井町神保)では、

「子主井井」と刻まれた平安時代(9世紀)の土器がある。「子」(氏族名)「主」(名前)が、九字によって護身を願ったことのある資料である。



荻窪倉Ⅲ遺跡全景

魔除けの造形

原始古代から、人々は顔や目に悪霊を打ち払う力があると信じ、土器や埴輪などに「異形」を表現し魔除けを願った。

大和田遺跡(高崎市上室田町)の深鉢(縄文時代中期)には目のような表現があり、容器の中身を守る意図が読み取れる。若田坂上遺跡(高崎市若田町)の人形土器(弥生時代後期)には人の顔が意匠され悪霊から死者を護る役割が考えられる。



中二子古墳
線刻人面付円筒埴輪



太子塚古墳 戟をもつ盾持人埴輪

古墳時代では盾持人埴輪に魔除けの造形が施された。山名原口Ⅱ遺跡(高崎市山名町)の櫓が表現された顔や太子塚古墳(高崎市箕郷町和田山)の盾面の戟(武器)の造形は魔除けが強調されたものと思われる。また、中二子古墳の人面が線刻された円筒埴輪には群邪の役割を持たせた可能性がある。

奈良時代以降の鬼瓦は鬼の形相を表現し、近世以降では家紋や福の神など縁起物を表現して建物や住む人を守るために魔除けを願った。

魔除けの鏡

多胡碑周辺遺跡 銅鏡(背面)



鏡は古墳時代には死者を守るため、平安時代には仏教と結びつき、中世には神の加護を得る身代わりとするために使われた。また、鏡は地鎮や水辺でも祭祀に使われた。

多胡碑周辺遺跡(高崎市吉井町池)では、古墳時代前期の獣紋鏡が土坑に納められていた。玉や鍾と共伴しており、副葬品だった可能性がある。

元総社蒼海遺跡群(137)(前橋市元総社町)では、平安時代(10世紀後半～11世紀初頭)の竪穴建物跡から八稜鏡1面が出土し、土坑からは五稜鏡1面・素文鏡1面が鉄鈴・鉄鐸・雁又鍬4本・銅滓と一緒に出土している。仏教に関連する魔除け・地鎮の鏡として使われたと考えられる。

国府南部遺跡群(高崎市引間町ほか)の、中世(13世紀後半～14世紀前半)の1号土塚には、和鏡1面が硯・墨・小神像などと一緒に出土している。この鏡は生前の化粧道具としてだけでなく死後の神仏の加護のために副葬された可能性がある。

魔除けの赤

「赤」は「太陽・火・血」を連想するため、古くから生命を象徴する特別な色とされた。人々は「赤」を呪術的な色とし、悪霊や災いを払う魔除けの色として、ベンガラ(酸化鉄)などを使い、土器や墳墓の内部を赤く彩色した。



高崎情報団地II遺跡 細文土器・浅鉢

高崎情報団地II遺跡(高崎市中大類町)の浅鉢

(縄文時代中期)ではベンガラと漆が塗られ、水漏れを防ぐ効果と呪術的な意味が考えられる。

八幡遺跡(高崎市八幡町)の壺(弥生時代後期)にはベンガラが塗布されており、内容物を守る願いが読み取れる。

古墳時代では前橋天神山古墳(前橋市広瀬町)や保渡田八幡塚古墳(高崎市保渡田町)、前二子古墳(前橋市西大室町)などの棺や石室の内部が赤く塗られ、悪霊から死者を守る意図が考えられる。

奈良時代以降では寺院の柱などが赤く塗られ、防腐効果と魔除けの効果があったとされる。

江戸時代には疱瘡(天然痘)除けとして赤色を用いられ、「だるま」や「赤べこ」などが広まった。



前橋天神山古墳の埋葬施設(粘土層)

テーマIV 祈り・願う

天下泰平

「防ぎ」「護り」「祓う」行為によっても、安全・安心な日常生活が満たされないうち、先人たちは敬虔に「祈り・願う」しか術がなかった。

「天下泰平」はコロナ禍や自然災害など、不安材料が多い現代にも通じる願いである。また、「五穀豊穡」と「子孫繁栄」も時代を超えた万民共通の願いで、遺跡に遺る祭祀の跡や遺物にもその願いが現れている。

江戸時代には「廻国(供養)塔」と呼ばれる石造物が各地に建立された。これは、数ある仏教の経典のうち「大乘妙典」すなわち法華経を66部写経して、それを66か所の霊場(日本は66か国に分かれていた)に奉納する際に、記念として建てた供養塔の一種である。

しかし庶民が霊場をすべて廻ることは困難であった。そのため、実際に廻国をしている行者に対して建てることが多かった。造立者となることで「功德」を得ようとしたのである。

さて、廻国塔には「天下泰平」「国家安全」などの文字が刻まれている。江戸時代は200年以上泰平の世が続いたことで知られるが、一方で災害や飢饉が発生し、疫病が流行した。そのため廻国行者が村に立ち寄ると、人々は仏に平和を祈って「天下泰平」のありがたさを碑に刻んだのである。

廻国供養塔(高崎市正観寺町龍泉寺) 享和3(1803)年



五穀豊穡・農耕祭祀

縄文時代の終わり頃、日本人の生活が農耕・稲作へと大きく変化すると、人々は天候・災害等が大きく影響する農業に超自然的・神秘的要因が関わりと考えるようになる。これに伴って春には豊穡を神々に祈り、秋には収穫を感謝し、凶作になれば神々の怒りを買ったと考え、それを鎮めようとする文化が形成された。



柳久保遺跡 墨画土器

柳久保遺跡(前橋市荒子町・荒口町)の平安時代の水田跡から出土した墨画土器は神々の怒りを鎮めるための儀式に使われたとみられており、災いの象徴として「鬼神」が描かれ、同時に描かれている馬は疫病が急速に広まっていくさまを表している。

9世紀に成立した『古語拾遺』(御歳神)の段には、御歳神という鬼神の怒りを鎮めるため、水口に牛の肉をはじめとした供え物を捧げたという記述があり、この土器もこの儀式との関連が示唆される。

子孫繁栄

「土偶」は、一般的に子孫繁栄を祈願してつくられたとされ、元総社蒼海遺跡群(13)(前橋市元総社町)や八幡山遺跡(高崎市山名町)出土の土偶は分銅型(ヴァイオリン型)をした「板状土偶」と称される。縄文時代前期に作られ、2つの穿孔で目を、突起で乳房を模して女性の姿を表現している。



横沢柴崎遺跡 柄鏡形敷石住居

同じく縄文時代の儀具「石棒」は、男性器をかたどったとされる長い棒状の磨製石器である。石棒祭祀は生殖行為だけでなく男性の成人祝いや狩猟・漁業の成功を祈る祭祀に関係した祭祀行為とされている。

また、子供の健康を祈る儀式「胞衣納め」との関連が考えられる「埋甕」は、荒砥前原遺跡C区(前橋市二之宮町)や横沢柴崎遺跡(前橋市横沢町)の縄文住居跡に敷設されており、横沢柴崎遺跡の柄鏡形敷石住居では張り出し部分の先端と本体との連結部の2か所から埋甕が見つかっている。



元総社蒼海遺跡群(13) 板状土偶出土状態